

## 『副島種臣全集』刊行の辞

早稲田大学教授・本全集編者 島 善高

このたび慧文社から『副島種臣全集』が出版されることになった。「著述篇」と「関係文書編」の二つに分け、「著述編」は平成十六年末に、「関係文書編」は副島種臣没後百年を期して、平成十七年度に出版される運びである。

副島種臣はマリウス号事件や日清関係で近代日本外交の独自性を毅然として内外に示し、また独特の書風を樹立した人物としても有名であって、伝記も数種類出版され、書の展覧会も度々開催されてきた。しかし、副島の政治的・外交的業績を総合的に捉えるような試みはまだ十分には行なわれていない。

日本外交のあり方が厳しく問われている昨今、副島種臣の全業績が一望できるようにすることは、まことに時宜に適したことであり、学界に寄与するところもまた大である。

本全集の「著述篇I」には、坊間に見ること稀になった『蒼海全集』が新たに目録を付して復刊され、「著述篇II」には『精神教育』、『副島先生蒼海閑話』が収録されるほか、雑誌に掲載されただけで閲読に不便であった『副島伯経歴偶談』も翻刻される。

他方、「関係文書編」には国立国会図書館憲政資料室等に所蔵されている副島種臣関係文書がほぼ全文翻刻されることになっており、近代史研究者にとっては非常に便利である。

慧文社々主の中野淳君は、実に篤学の出版人であって、是非とも副島種臣を取り上げたいと相談せられた。私は副島と同じ佐賀県生まれで、かつて副島の兄枝吉神陽の伝記を纏めたこともあり、副島の人物と思想には兼々から関心を寄せていたので、中野君の志に満腔の敬意を表すると同時に、監修者として微力ながらお手伝いすることをした次第である。

願わくは『副島種臣全集』が江湖に迎えられ、本全集が慧文社の代表的な出版物の一つとなることを念じて止まない。

## 『副島種臣全集』を推薦する

(財)郷学研修所理事 山口勝朗

明治維新の元勳・多士濟々たるなかに、副島種臣(蒼海と号す)は独特の風骨をもって一世に聞こえた人傑である。彼は幕末維新に際し勤皇の志士として、また明治六年の対清国外交においては国威を内外に宣揚した名外務卿として、さらにその後、明治天皇の侍講として、不朽の光芒を放っている。

明治三十八年、七十八歳の生涯を閉じるや、「日本」新聞では論壇の雄・三宅雪嶺が「三代の風格」と題する社説で、副島に対して「人は多く三代(夏・殷・周)を連想した。私は伊尹(殷の湯王の名宰相)や太公望(周の武王の師)がどんな人物であったかと問われれば、副島伯を思い出さざるを得ない」と申している。大阪朝日新聞でも、令名高い大記者・内藤湖南が「天才なる予言者もしくは一種の神秘力をもつる英雄」であり、「時代を超越し、国風を超越せる人物」であると評している。

本全集の刊行によって、蒼海先生の突々(えきえき)たる精神を容易に偲ぶことができるようになったことは、喜ばしい限りである。

## 『副島種臣全集』は中日両国の快挙

早稲田大学教授 劉傑

「世界の中の近代中国」への関心が高まってきた近年、副島種臣の名は中国の歴史研究書にも頻りに登場するようになり、外務卿在任中の一八七三年、台湾出兵の処理や日清修好条規の批准書交換のため渡清した副島は、華夷秩序の象徴であった三跪九叩の礼を拒否し、清国皇帝に拱手の礼を施すだけで済ませた。副島の行動は、嘗ての中国では侵略国日本の傲慢と無礼と評されてきましたが、最近では、中国の対外関係史の転換点と再評価されるようになりました。大清国皇帝が略式的な挨拶を受け入れたことは、伝統的な朝貢システムの終焉と保守的な「天朝」制度の崩壊を意味するものと認識されています。副島が皇帝の待ち構える紫光閣に足を踏み込んだ瞬間は、中国が閉鎖から開放へ、野蛮から開化へ進む瞬間であったと指摘する学者さえいます。中国では、ウエスタン・インパクトに優るとも劣らないジャパン・インパクトへの再確認が進められているのです。

日本近代史のみならず、中国近代史にもその名が留められる副島種臣の全集が出版されることは、中国の歴史学界にとっても誠に喜ばしいことであります。

## 「副島種臣全集」収録内容

**著述篇 I (既刊・528頁) ISBN4-905849-07-1**  
 蒼海全集(復刊)  
 蒼海全集・目次(新たに作成)  
 解題 定価:33600円(税込)



**著述篇 II (既刊・498頁) ISBN4-905849-08-X**  
 精神教育(明治34年11月) ※巻頭カラーグラビア 全て新訂版  
 蒼海閑話(明治31年3月)  
 経歴偶談(明治30年12月～)  
 解題 定価:33600円(税込)



### 著述篇 III (平成17年夏～秋刊行予定)

恩(明治18年7月)・元祖の遺徳(明治22年9月)・同人卦(明治22年10月)・世道の挽回(明治24年)・会頭副島伯の演説(明治27年)・[滄海窓問答(明治31)]・教育雑話(明治31年1月)・日本の歴史は道德の經典なり(明治33年)・清国改革の急務(明治34年8月)・武士談(明治35年)・明治初年外交実歴談(明治36年)・清国更革難(明治37年)・明治の外交(明治40年)・年譜・解題・・・等を収録予定。 予価:33600円(税込)

関係文書編、補遺も以後続刊予定!

## 研究者・図書館必携の基本図書!

- ◆ A5判・上製・函入り
- ◆ 各巻平均500ページ
- ◆ 2004年12月1日刊行開始!
- ◆ 定価:各33600円(税込)  
(分売可)

発行: 慧文社 〒174-0051 東京都板橋区小豆沢2-22-16-2A TEL 03-5392-6069 FAX 03-5392-6078

小社の書籍は、書店、各取次図書館課、TRCなどからお取り寄せ可能です。

台帳	部数	慧文社	〒03-5392-6069	〒03-5392-6078
		セット	副島種臣全集	
		各巻—定価1111400円(税込)		